

自己と他者

自由の基盤となるのは、人格（カント）。人格を構成するのは、他者とは異なる自己の存在である。出生後の幼児は自他未分。自他はいかにして分立するか。独立してから、自他はいかに関係し合うか。幼児の対人関係と成人同士の〈出会い〉に、焦点を合わせて考える。

1 幼児の対人関係——発生論的観点

・鏡像段階——生後6か月以降

鏡に映る像を〈自己〉として認識する。→①

自身が見られる存在であることに気づいた時期から、人格を支配する〈他者〉＝社会との関係が成立する。

・一人称代名詞〈私〉の使用——19か月以降

代名詞の使用によって、自他の人称的区別が成立し、それまでの癒合的社会性がのりこえられる。→②

2 自己認識と他者認識

・〈出会い〉の現実

自己と他者との異なりに直面する出来事——〈出会い〉。

未知の風土に接する旅によって、〈自己〉と〈他者〉との異なりが実感される。→③

・〈対話〉による相互承認

他者との出会いから、相互理解に向けた働きかけ（→対話）が生まれる。

対話は、自他の〈似る〉（共通性）・〈似ない〉（差違性）を確認する手続き。

Q. たがいに似ないことが判った時点で、どうするか？

→ a) 対話を打ち切る

b) 対話を続ける

対立する二者の〈あいだ〉を開くのは、第三者（媒介者）の存在 →④

[資料]

① 鏡像の意味

「幼児にあっては、鏡像の了解とは、鏡の中に見えている姿をおのれの姿と認めるところにあります。幼児の世界に鏡像が入り込んで来るまでは、身体は幼児にとって強烈に感じられはしても混沌とした現実なのです。その時まで、彼は自分を一度も見たことがなかったのであり…ところが鏡の中の像を通して、彼は自分自身の観客たりうようになります。幼児は、鏡像の習得によって、自分が自己自身にも他人にも見えるものだということに気づきます。…その鏡像とともに、自己自身の理想像、精神分析学の用語で言う「超自我」の可能性が出現してきます」(M. メルロ＝ポンティ「幼児の対人関係」『眼と精神』滝浦・木田訳、みすず書房、1966年、162-3頁。原文の強調点省略)。

② 一人称代名詞〈私〉の使用

「私」という代名詞は、少なくともその言葉の完全な意味では、つまり相対的な意味の言葉としては、固有名詞よりも後になって現われてきます。「私」という代名詞が本当にその完全な意味をもちうるのは、幼児がそれを自分個人を指す個性的指標として用いるときではなく…自分の目の前にいるどの人もみなそれぞれに「私」ということができるし、その人たちはみな自分自身にとっては「私」であり、他人から見れば「お前」なのだということを、幼児が理解したときです」(同書 185頁)。

③ 自己認識と他者認識

「人間は必ずしも自己を自己において最もよく理解し得るものではない。人間の自覚は通例他を通ることによって実現される。しからば沙漠の人間の自己理解は霖雨の中に身を置くことによって最も鋭くされるであろう。このことは沙漠的ならざる人間が旅行者として具体的沙漠に接近し得ることを立証するものである。彼は沙漠において己が歴史的・社会的現実のいかに沙漠的ならざるかを自覚するであろう。が、この自覚は沙漠の理解によって可能となるのである」(和辻哲郎『風土——人間学的考察』岩波文庫、1979年、54 - 55頁)。

④ 第三者の介在

「Aに属する主体甲と、Bに属する主体乙とが、言葉を交わす場面において、「二つのロゴス」がぶつかり合い、まさしく「対話」(ディアロゴス)と呼ぶべき状況を現出する。ここにおいて、「媒介者M」が浮上してくる。それを、人称的存在〈彼〉に見立てるなら、〈彼〉は、甲乙のいずれからも距離を置く中間者丙であることがふさわしい。そうであるためには、丙は、AないしBの成員でありながら、「中立」であることを表明することができるか、もしくはABのいずれでもないCの成員であるか、そのいずれかでなければならない。対立する二者の対話を成立させるためには、中立的な第三者が〈あいだ〉に立つことが、必要不可欠だからである」(木岡伸夫「〈二〉と〈三〉のあいだ——対話の条件」『関西大学 文學論集』第七十二卷 第一・二合併号、2022年)。

《自己と他者》ノート

1 発生論的観点

発達心理学（ワロン）と精神分析（フロイト～ラカン）をもとに、「幼児の対人関係」を明らかにしたメルロ＝ポンティ（現象学）。

母胎から出た赤ん坊は、生後 6 か月以降に、自他未分の状態から他人とは区別される「自己」の存在を知る——「鏡像段階」。いまいる位置に感じられる自分——「内受容的身体」（S）——と鏡に映った自己の身体像（S'）とが、別々でありながら、同一である関係（不一不異）に目覚める。Cf. アヒル、イヌ、チンパンジーとの違い。自己が「観られる身体」であることに気づくことから、他人に認められる自己の理想像を演じるという仕方で、「超自我」（フロイト）が形成されてくる。

○超自我——フロイトは、パーソナリティを「エス」（es）、自我（ego）、超自我、の三つの領域に分ける。エスは、非人称的主体で、快楽原則に従う衝動としての主体。そうした衝動を検閲する働きは、もともとは両親や社会など、自分を超えたところに源を発しているの、「超自我」と呼ばれる。「自我」は、無意識に根ざしながら生じる、他とは異なる「自己」の存在についての意識。

19 世紀以後、深層心理学や精神分析学によって、個人的自我が自己と他者との抜き差しならない「不一不異」の関係性に支配されている事実が明らかにされていった。

2 自己認識と他者認識

・〈出会い〉の現実

自分が他人とは違うということを知る経験が、〈出会い〉である。日常生活に生じる出会いとは異なる、衝撃的な出会いは、他者の世界（風土）に入る体験（旅、留学）に伴う——
ex. 和辻による「青山的人間」と「沙漠的人間」との同時発見。→③

・〈対話〉による相互承認

他者との出会いから、相互理解に向けた対話が生まれる。

対話は、自他の共通性と差違性を確認する手続き——他者理解には、二つの条件が必要。

Q. たがいに〈似ない〉ことが判った時点で、どうするか？

→二つの選択肢：a) 対話の打ち切り、b) 対話の継続

対立する二者の〈あいだ〉を開くのは、第三者（媒介者）の存在 →④